

海の向こうから考える桜ヶ丘キャンパス：国際学会での楽しみ

著者	森元 陽子
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	31
ページ	3-6
発行年	2011
URL	http://hdl.handle.net/10232/17034

『海の向こうから考える桜ヶ丘キャンパス』

国際学会での楽しみ

森元 陽子

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
顎顔面機能再建学講座 歯科保存学分野

私の国際学会デビューは大学院4年目、2006年の夏。念願のスペイン・マドリッドで開催された Euro Perio での発表だった。大学院1年目の時に3年に1度開催される Euro Perio に参加された医局の先生方の話を聞いて、次回スペインでの学会で絶対に発表したいと、一気にモチベーションは上昇し、論文を仕上げるといふ目的もさることながら、大学院での仕事に邁進したような気がする。

教員になってからも研究を続け、科研費や国際学会派遣事業で学会発表の費用を獲得できたため、2008年カナダ・トロントや2010年スペイン・バルセロナで開催された IADR (International Association for Dental Research) 年次総会、2010年アメリカ・ハワイで開催された AAP (American Academy of Periodontology) 年次総会での発表の機会を頂けた。海外旅行は学生の時からよくしていたが、学会発表となるとやはり気分が違ふ。国内での学会とも違い、良い意味で緊張感があった。国際学会は各国からの参加者にあふれ、活気づいている。各分野で世界をリードする講師による特

別講演やシンポジウム、オーラルセッション、ポスターセッションはベーシックなものから最先端の研究に渡り、非常に興味深く、いつも良い刺激を与えられる。すべてが英語なので、内容を完全に理解するのは困難だったが、スライドや図表などで、視覚的に理解できた。やはり英語の勉強をしっかりとしないといけないなど毎回痛感させられる。自分の発表はポスターではあったが、討論の時間があるため、事前にディスカッションのための英語を勉強し、論文を読み込んで学会に臨んだ。ドキドキしながら90分程ポスターの前で待機。毎回、特に厳しい指摘はなく、熱心に内容を質問されたり、同じ分野の研究者から試薬の提供を依頼されたりと和やかに発表時間は経過していった。とある先生のアメリカ留学時代の同僚の先生が「Kagoshima University」の表記を見て、嬉しそうに話しかけてくださるといふ素敵な出会いもあった。

学会は朝から夕方まで。学会が終わってからが、旅先での楽しみ。そう、その土地の観光と、美味しい食事。これを楽しみに学会に参加している事は否めない。

2006年夏のマドリッドはとても暑かった。緯度が高いせいもあり、夜は遅くまで明るく、1日を長く楽しめた。マドリッドでの食事はパルでのイベリコ豚の生ハムとパエーリャ、シャンピニオン(大きなマッシュルーム)のガーリックオイル焼きは特に気に入りで、2日連続で食べに行った。また、世界で最も古いレストランとしてギネスブックに登録されている1725年創業の SOBRINO de BOTIN では名物料理の子豚の丸焼きを堪能した。皿の上に子豚がそのままの姿で登場したときにはさすがにびっくりしたが、柔らかい口当た

りのとってもジューシーなお肉は本当に美味しく、偉大な作家ヘミングウェイがこよなく愛した店であることがうなずけた。タブラオでフラメンコを楽しんだ夜もあった。素敵な歌声・ギターと軽快な踊り。本場アンダルシア地方に行ってみたくなった。それから、ヨーロッパは美術も楽しめる。国立ソフィア王妃芸術センターではパブロ・ピカソのゲルニカに出会えた。原色の作品の多い中、モノトーンのかなり大きな作品で、戦争に対する抗議の念が込められているらしく、衝撃的な作品だった。



学会の後は、教授の昔の留学先であるスイスのジュネーブを訪問。ジュネーブ大学を見学し、研究の打ち合わせをおこなった。スイスを訪れたら、やはりチーズフォンデュ。これは本来、寒い冬に身体を温めるためにワインと共に食すらしく、真夏に食べるのはクレイジーだと言われたが、本場の味を確かめるべく注文した。その日はたまたま2006年サッカーワールドカップの決勝戦で、ジュネーブはフランス、イタリア、ド

イツ系の人々に分かれているため、お店の中はイタリアとフランスの応援団で大騒ぎだった。サッカーの試合に夢中だったため、残念ながらチーズフォンデュの味はあまり記憶にない……。また、ジュネーブは時計の街。有名な時計のお店がたくさん並んでおり、お目当てのショップに直行して、頑張って貯めたバイト代で欲しかった時計を購入したことも懐かしい。



2008年夏、カナダ・トロントではやはりナイアガラの滝が印象深い。滝を間近で見ることができ、迫力満点の絶景だった。船に乗って滝に近づき、水しぶきで全身ずぶ濡れになりながらあのスケールの大きさを体感できた。食事は海産物とワイン。大好きな生牡蠣とロブスターに舌鼓を打ち、おみやげにアイスワインを

購入した。トランジットがアメリカのニューヨークだったため、帰国までの数時間ニューヨークの街も楽しんだ。タイムズスクウェア、セントラルパーク、5番街をものすごいスピードで歩き回った。イエローキャブに乗ってマンハッタンのダウンタウン端にあるバッテリー公園まで行き、遠くにある自由の女神を眺めるこ

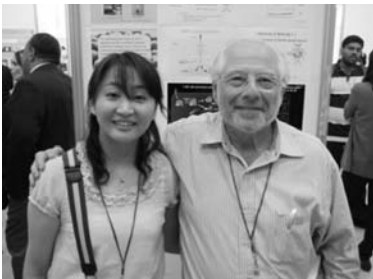
ともできた。夜はジャズを楽しむ予定だったが、学会の疲れもあったため、うかつにもホテルで朝まで寝て

しまったことが悔やまれる。



そして2010年夏、2度目のスペイン。憧れのバルセロナ。芸術の街バルセロナを語る上で欠かすことが出来ないのは、やはり巨匠アントニ・ガウディの「サグラダ・ファミリア」。地下鉄から降りて、初めて実物を目にした時、あまりの迫力に涙が出るくらい感動した。1882年に着工してなお未完成であり、現在も建築作業が続いているなんて、無駄な物は「仕分け」されてしまう日本では想像もつかないことだ。ほぼ毎日サグラダ・ファミリアに通い詰めてしまった。夜のライトアップされた姿は幻想的で格段に美しかった。独特のスタイルのカサ・ミラ、カサ・パトリョ、グエル公園、街灯に至るまでバルセロナの街中ガウディの作品

に満ちあふれ、歩いてみてまわるだけでも楽しかった。1899年建設のガウディ建築レストラン、カサ・カルベトでは、デニムにサンダルだったため、入店拒否されるかと心配したが、快く入店させてもらえ、少しリッチな夕食をとった。また、バルセロナといえば、サッカーのFCバルセロナ。残念ながら、7月だったためリーグ・エスパニョーラは開催されていないが、本拠地カンプ・ノウにはたくさんの人たちが訪れていた。バルサの試合、観戦したかったな。とにかく、バルセロナは明るく素敵な街で何度でも訪れたいと思った。



2010年秋のハワイ。旅行を含めてハワイは3回目であったが、日本語が少し通じるためか、海外という気がせずリラックスできる。学会はなんと朝の7時から14時まで。午後は有効に活用することが出来た。レンタカーで少し離れたビーチへ足を伸ばしたり、夕日を眺め、ウクレレを聴きながらホテルのバーで飲んだり、円高だったのでショッピングを楽しんだり。大きな大きなハンバーガーに胃をノックアウトされたこともあった。10月31日はハロウィンだったので、ワイキキビー

チのメインストリートであるカラカウア通りは衣装をした人たちのパレードで盛り上がり、アニメのコスプレをした日本人もたくさん参加していた。ハワイというだけあって学会への日本からの参加者も多く、懐かしい先生方とも久々に再会できた。アロハスタイルでの参加が奨励されていたので、お堅い学会という気はせず、陽気で和やかな雰囲気だった。ハワイのあまりの心地良さに日本へ帰国して日常に戻るのがとても悲しかった。



今回、この渡航体験記を執筆させて頂くにあたり、色々思い出してみると、学会発表という貴重な経験と共に、様々な国の食事や文化に触れさせてもらえたなと思う。

先日、ノーベル賞を受賞された米パデュー大学特別教授の根岸英一氏は、内向き志向が指摘される日本人研究者らに対し「若者は海外に出よ」という言葉を述

べられた。学会や留学等で海外の色々な刺激を受けることは貴重な経験であり、楽しく見聞を広げる事ができると思う。また、海外へ行くたびに日本の良さを再認識できる。

近い将来、また国際学会で発表できるよう、これからさらに研究活動に励みたいと思うと共に、多くの研究者が海外へ行ける環境が整うことを期待したい。